

# 夢の残照

夜空に舞うもの

風野旅人

旅人のザック

表紙・挿絵 Hiroshi

目次

プロローグ

5

## プロローグ

——例えば、夜空に浮かんでいる自分を想像してみる。  
 素足の下に広がる光の海——街を彩るイルミネーション——  
 それは必死に暗い何かを覆い隠すように光る灯火……  
 そして、頭上に輝く星たちは街並みから放たれる光で数多く  
 は見えないけれど、それでも幾千を越える星たちが自分達の存  
 在を示すかのように輝きを湛たまたえている……  
 その空の中をバラシュートもグライダーも無く、唯々そこに  
 浮かんでいる自分……  
 「そう、こんな感じ……」  
 あたしはぼんやりと星々が煌めくその空を眺めていた……  
 「……って、どーしてあたしが、こ、こんなところにいるのよ  
 おおおおおお——!?!」  
 そう、あたしは確かに『その場』にいた。  
 あたしの足元には何も無い。  
 つまり、言葉通り空に浮いているのだ!

## 第1話 夜空に舞うもの

「……と、取りあえず落ちる心配は無さそうね……」  
 ひとしきり叫んだ後、あたしは少し冷静になって足元を恐る  
 恐る踏みしめてみる。  
 そこには何も見えないが、足には柔らかい高級羽毛布団を踏  
 みしめたような、ふわふわとした反発感はあるものの、これよ  
 り下へと落ちるような感じはみられない。  
 とりあえず、墜落の心配をしなくても良いことが確認できた  
 ので、あたしは改めて周りを見渡してみた。  
 その視界を遮るものが見当たらないことから、地平線の向こ  
 うまで見える高さにいることが改めて思い知る。  
 そして、眼下に広がる街並みは間違いないあたしが住んでい  
 る町だ。  
 「あれはいつも行っている本屋だし……あそこにあるのはこの  
 前服を買った洋品店だし……」  
 あたしは見下ろす目を皿のようにして、黒く立ち並ぶ街並み  
 から自分の知っている建物を列挙を始めた。  
 ……意外に普段の視界にはあるはずもない、空からの眺めで  
 も建物の判別ってつくのね……って!  
 「こ、こんなことしている場合じゃなかったあっ!!」  
 あたしは自分を通している高校の学舎まなびやを指差したところでよ  
 うやく我に返った。  
 「……問題はこうしてここにいるのかと、帰る方法よね……」  
 今になって気が付いたが、こんな上空に浮いているのに全く  
 寒さを感じないのだ。  
 本来、上空は強い風が吹いているというけれど、それを肌に  
 感じる事も無い。  
 今のあたしは、風のない空中で留まっている風船の如くの状態  
 である。  
 「……分からない……何であたしここにいるの?」  
 とその時、気付いた事があった。  
 あたしの服は、薄着……それもパジャマのままであったこと  
 だ。

「……と言う事は……」  
 常識で考えれば一つしかない解答をあたしの頭は導きだす。  
 「これは夢! そう夢しかない!」  
 納得顔でいずこかに向けて高らかに宣言するあたし。  
 「なあ〜んだ、夢かあ〜」  
 あたしは笑いながら星空を見上げた。  
 「きつと寝る前に、星の本なんか読んだからこんな夢を見たの  
 ね……えっ……」  
 その時、あたしの視界の中に星以外の煌めきが映った。  
 それはふわりふわりと、木の葉のように漂いながらがらあた  
 しに向かつて降りてくる。  
 あたしの目の前まで降りてきた『その輝くもの』に手を差し  
 伸べると、綿毛のような柔らかい感触が手の中に生まれた。  
 「……羽根……?」  
 あたしに向かつて降ってきたそれは、白に光り輝く大きな羽  
 根だった。  
 「綺麗な羽根……どんな鳥の羽根なんだろう……」  
 あたしの手の中に収まったその羽根は、まるで真珠か何かの  
 宝石のような白い輝きを放っている。  
 その美しさにあたしが見とれている最中、目の端を同じよう  
 に輝くものが上から下へと次々に通り過ぎて行く。  
 「……えっ……!?!」  
 慌てて横を振り向くと、通り過ぎてゆくそれらも、今あたし  
 が手にしているものと同じ——光る羽根——であった。  
 再び上を見上げると、あたしに向かつて無数の光の羽根が舞  
 い降りてくる。  
 「わあ〜!」  
 あたしは優雅に舞い下りる羽根に両手を広げながら、その光  
 景を見つめていた。  
 「すっごく、綺麗……」  
 あたしは煌びやかな光のダンスに溜め息を漏らす。  
 舞い落ちるその光の羽根は絶えるどころか、次第にその密度  
 を増し、あたしの視界を埋め尽くして行くのだった。  
 「いったい、どこから降って来ているんだろう……?」  
 あたしは手で額ひたいに底をつくり、舞い落ちてくる羽根を避けな  
 だ。

から、羽根が落ちてくる上空の一点へと目を凝らす。  
そして……星の輝く夜闇の空の中で……あたしはそれを見つけた……

あたしを取り巻いている羽根たちが舞い来るその一点には淡色に輝く何か動いている。

まるで川辺の螢のように動きまわるそれは、何かの踊りのようだ。

その何かがある場所で舞うたびに、あたしの周囲に羽根が満たされゆく。

しかし、ここからではそれ以上の事は分からない。

「うゝ…… もっと近ければ良く見えるのに！」

あたしは見上げたままもどかしげに呟く。

けれど……次の瞬間……

ぐうつん！

あたしの体は今の場所よりも更に上空へと舞い上がっていった！

まるで巨大な掃除機に吸い込まれるように、強引に上空へと体が引つ張り上げられる。

「のああああ——!?!」

しかし、それも一瞬のことで、すぐにスイッチが切られたように急停止すると、再び宙に漂う状態に戻った。

「……さつすがあ！ あたしの夢！ 願えばそのとおりになるのね！」

今の現象は夢の中の一出来事として、即座に片付けるあたし。

……冷静に考えると、いくら夢でもそんな思い通りになるはず無いんだけどね……

取りあえず、この現象についての考察を瞬時にして片付けたあたしは、再び上を見上げたのだが……

「あ、あれ!? いない!?」

先ほどまであたしの頭上で舞っていた何かはその場にはいなくなっていた。

あたしが上空へと飛ばされていたのは、ほんの一瞬の事だ。

その一瞬であたしの視界から消える事が出来るほどのスピード

なんて、普通の鳥でも無理だと思っけど……

そう思い、あたしは改めて辺りを見渡した。

「あつ!? い、いた……」

それは、本当にすぐそば——実に十メートルも離れていない——にいた。果てしなく間抜けなことに、あたしはすぐに気がつかなくなったわけだけ……

それは『人』だった。

ただし、人の形をしている何かと言った方が正しいかもしれないけど……

ぱつと見だけでも、背中に翼が生えていると言っただけで、既に十分普通の人じゃ無いと思うし……

あたしはかたわらで未だに何かを舞っている、『それ』をまじまじと眺める。

真っ白な素肌……よく『雪のように白い肌』っていうけど、

この人の場合はあまりにも白過ぎて、透き通るような白……言うなれば白い光みたい……

その肌上には、これまた白い霞のような薄手の服を身に付けていた。

……こんな上空でそんな格好をしていたら、百発百中で間違いないく風邪を拗らせそうだけど、パジャマ姿のあたしがいえる事じゃないわね……

その背中から生えている、これまた例に漏れず白いその翼は、夜空の闇に淡く光を放っていた。

あたしが手にしている羽根もその一部だったのだろう、今もその翼から絶え間無く地上の街並みへと羽根が舞い降り続けている。

そして、夢げで……どことなく憂いを秘めたその表情は、まさしく天使の顔だった。

天使のようなやさしい笑みとは良く言うけど、この人の笑みは、男女分け隔て無く人を引き付けてやまない何かを持っている。

かくいうあたしも、その笑みを見ていてちよつとくらつとしてしまった。

……あたし……天使が出てくる本とか読んだかなあ……

軽く記憶を辿ってみるが、ここ最近ではそんな本やアニメ

(友人に好きそうなヤツがいるけど)を見聞きした覚えはさしあたってない。

しかし、その天使の神々しさは本物で、あたしは思わず直立不動の体勢のままで、その天使の舞を見とれていた。

しばらく眺めていると、なんらかの定まった舞を舞っている

というわけではなく、自分の翼とその手にしている、淡く紅い光を放つ細い糸にじやれているように見える。

そして、素足に届きそうな長い栗色の髪は、その天使が舞う毎に輝く翼の光を受けて柔らかく穏やかな光を添えていた。

……で、すっかりその『天使の舞』に骨抜きにされていたあたしは、いつの間にか『天使』がこちらへと振り向いていたことに気がついていなかったりしたわけだけ……

「……えつ、あ、あう……、ええええええ、えつと……」

一瞬遅れて慌てふためくあたしが発した言葉は、非常に怪しいものとなるのは必然か……

しかし、その『天使』はあたしの奇っ怪な反応にも、何事もなかったようにあたしへとその微笑みを向けていた。

「あはっ、あはははははは——!?!」

その天使の態度に、あたしは思わず乾いたような笑いを返してしまった。

……しかし、この笑みを向けられて「私のために死んでね」なんて言われたら、世の男どもは惜しげもなく命差し出すわね……

今時ないわよね。こんな世俗に歪んでそうもない清楚な女の子なんて……

その『天使』は、今もあたしを見つめ、微笑んでいる。

「……えつと……ここで何してるんですか？」

その笑みにつられて、あたしはめちやくちや間の抜けた質問をしてしまう。

しかし、あたしの問いには答えず、その『天使』は不思議そうに首を少し傾けると、あたしへとスーツと近寄ってくるのだった。

かといつても翼がははためいて飛んできたわけではなく、そのままの姿勢で平行移動でこちらへと近づいてきたのだが。

……これを暗闇でやられたら、冗談抜きで怖いわよ……



『天使』はあたしのすぐ側まで来ると、そつと左手を差し出してくる。

「え…… あ、はいはい……」

めちやくちや罪作りな表情そのままに微笑みかけている『天使』に、あたしも反射的に手を差し伸べてしまう。

……………が……………

「美琴お——!!」

唐突に響いた声に驚いたあたしは、思わずその差し出した手を引つ込めてしまった。

その声は……あたしたちがいる高さよりもさらに上空から響いてきたのだが……

「だ、誰!？」

聞こえてきた声からすると男みたいだけど。

あたしの目の前に浮かぶ『天使』もその声がした方へと顔を向けていたが、その表情には少しも変化が見られず、先ほどと同じように笑みが浮かべていたのだった。

「ようやく、見つけたぞ!」

その声の主は、あたしたちの頭上から滑るように降りてきた。あたしと目の前にいる『天使』——美琴って呼ばれていたみたいだけど——の近くに降り立ったその男は厳しい顔をこちらを向けて睨めつけている。

当然、直接あたしを睨めつけているわけではなく、単に男の目の前にあたしと天使と直線上に並んでいるためだけだね。

ぱつと見た感じ、その男はあたしとそう年齢差は感じない。しかし、顔の整い具合から若干幼さも感じるくらいだ。

正直なところ、普通に(？)美形と呼ばれる異人族に属している人種だろう。……あたしのこれまでの人生において、身の回りにはこれっぽっちも縁のない人種とも言えるが……

そんなうら若き高校生、かつ純真なる乙女の短い人生の中にあった悲しい話は、今はどうだつていいということにしておき、それよりも今現在で重要なことは、その男の背中にも翼が生えているということだろう。

ただ、美琴と呼ばれた『天使』とは違うのは、はつきりと翼

と分かる形をしている事だ。

美琴の翼は、白に輝いており透明感にあふれていて、正に『これぞ天使の翼!』って感じだけど、この男の翼は本物の鳥——そう例えば鷹とか鷲とか——いわゆる猛禽類の翼を模っている。

そして、広げられている翼の片方だけでも、その男の身長のおよそ二倍くらいあるかもしれないほどの大きな翼であった。

「ち、ちよつと…… あなたはいつたい何者よ……!？」

だが、その男はあたしの存在をまるつきり無視して、美琴と呼んだ天使の少女を睨めつけたまま口を開く。

「また、こんな所で遊んでいたとはな……」

などと眩きながら、男は無造作に美琴に近づいてゆく。

ところが、対する美琴の方は特に気にした様子も無く、微笑みを浮かべたまま手にしている紅い糸を指で弄んでいた。

……のだが……

ほんつ!

やたらと音が抜けた軽い音を立てて、右手に絡められていたはずの紅い糸が突如として……

「な、なんですつてえ!？」

黒光りする銃口を備えた拳銃へと姿を変えていた!？」

「ちっ!」

男は舌打ちをすると、即座にその場を飛び退いていた。

あまりの展開に唯一ついて行けず絶句しているあたしを尻目に、目の前でその銃口が火を噴く!

パアーン! パアーン!

美琴はいい加減としか思えない狙いの付け方をしながら、絶え間なく銃の引き金を引いている。

しかし、その顔からは張り付いたように笑みが消えてはいなかった。

それが先ほどまでの優しいげな雰囲気と相俟って異様さを増幅させている。

している銃を軽く振るうと瞬く間に元の紅い糸へと戻してしまつた。

そして……またあの神秘的な笑みを顔に浮かべるのだが……

「あは、あはは……」

「こらそこ! 油断するな!」

またしてもそれにつられて笑いを返してしまうあたしに、美琴を見据えたままの男が叱咤を飛ばしてきた。

その時、美琴の手に絡みついている紅い糸が再び変化を見せる。

糸は淡い光を放つ玉へと姿を変えると弾けるようにして分裂し、美琴の周りでふわふわと漂いはじめた。

一見、大きい蛭が放つ光のような感じがするけど……

「なっ!? いきなり精霊輝弾か!？」

光の玉の出現に驚愕した男は、あたしの方を振り向くと、「逃げるぞ!」

といつて、無造作にあたしの手を掴みあげた。

「ちよつと、ちよつと! どこに連れて行く気よ!？」

とつさに抗議をして睨めつけるあたしに男は、「死にたくなければ、大人しく掴まっつていろ!」

と一喝する。

バリーイイーンっ!

男の声が終わるとほぼ同時に、あたしたちの目の前で激しい光が爆発し、次の瞬間にはガラスが砕け散つたような音を立てて目に見えない何かが崩れ落ちるのを感じた。

「う、うう、目の奥がチカチカする……な、何なのよ、一体……」

至近距離で強い光を浴びたあたしは目を押さえながら眩く。「さつき作つた防壁が壊されたんだ。今のうちにここから離れるぞ!」

あたしの眩きに手をつないでいる男が答えた。

その男はあたしの手を引き、美琴と呼ばれた少女と同じようにその大きく広げた翼をはためかせせる事無く、夜の上空をもの凄いい早さで飛翔する。

掠めながらも何とか銃弾をかわし続けてきた男だが、殆ど流れ弾のような弾丸が直撃しそうになった!

「ちいっ!」

カーアーン!

硬い音を立てて今まさに迫り来ていたはずの銃弾を男は素手で叩き弾く!

嘘っ!

……殆ど……いや完全に常識外れな展開を続ける二人……

あたしは既に傍観者その一に成り下がっていた。

……はずだったのだが……

おもむろに銃口があたしの方向に向けられたあつ!？」

「あ、あたしは全然関係ないわよ——!!」

叫びを上げながら横に逃げようとするあたし。

もはや美琴と呼ばれた少女にとつて、目の前にいるものすべてが敵なの!？」

あたしの訴えをまるつきり無視し(というか聞こえてはいるかすら、その表情からはこれっぽっちも伺えない)、引き金を引こうとする美琴。

「やめろ! 美琴!」

男は叫びながら美琴とあたしの間に飛び込んでくる。

「風よ! 我が命に従って疾風の障壁となれ!」

美琴が引き金を引くより一瞬早く男が呪文のようなものを叫ぶように唱えた。

それとほぼ同時に美琴から無数の銃弾が放たれる!

カーンっ! カーンっ! カーン!

しかし、硬い金属音のような音を響かせ、男とあたしに向けられた銃弾はすべて八方に弾き返された!

美琴とあたしたちの間に見えない壁のようなものがあるらしい。恐らくさつき男が唱えた呪文みたいなものは、これを作り上げるためのものだったのだろう。

それを見た美琴はまたしても表情一つ変えることなく、手に

る。これをピンチと言わずなんと言うべきか……!

「ど、どこまで逃げれば追つてこなくなるのよ——!!」

あたしは懸命に男の手を強く握りかえし、襷の如く風に身体をなびかせながら叫んだ。

「美琴に聞いてくれっ!」

男は何かを振り絞るかのような調子で吐き捨てるように叫び返してきた。

男の顔を斜め横——二人分の腕の長さは意外と遠い——からのぞき込むと、遙か前方を見据えるその男の唇が強く噛みしめたように白くなっているのが垣間見える。恐らくこんな高速で飛ぶために何らかの力を使っているのかもしれない。その顔には幾らかばかりの疲労の影が伺えた。

「だ、だいたい! 何なのよ! あんたもあの美琴つて子も……

こんな常識も物理法則もその他諸々も無視したこのやり取りはっ!!」

しかし、あたしは懸命に引つ張つてくれている男に怒鳴り声を浴びせかけまくる。

後から思えば悪かったと思わなくもないが、残念ながらこの時のあたしは、事情を知つてそんなこの男やその相手である美琴と違つて落ち着いていられるような立場ではなかった。

……まあ、そもそも今のあたしもじゅーぶん、物理法則を無視しているかもしれないけどね……

「……普通の物理法則がここには無いと言つたら、この出来事も常識になるよ……」

先ほどとは打つて変わつて、男は落ち着いたような口調で吹きを返してきた。

「普通の物理法則がない? じゃあ、ここは……」

あたしの言葉が終わる前に、背後から無数の光弾が追いつがる。

「ま、まずいわよ! 追いつかれてるっ!!」

こちらも尋常じゃないスピードで飛んでいるはずなのだが、さすがに弾と勝負するのは分が悪すぎるだろう。

「くっ! しつかり掴まっつて!」

「えっ……? つて、きゃあああああ——!!」



男は気合いを入れると、唐突に水平飛行から垂直に上昇する軌道に轉換した。

当然引つ張られているあたしもその軌道に追従するしかないわけだが、水平方向への反動が残ったまま上昇させられたため、三半規管が壊れそうな気持ち悪いめまいを強引に植え付けられる。

「ちよ、ちよっと！ 急に方向轉換しないでよ！」

「あ、あれを避け続けるにはまだ足りないくらいだ！ つ、次も行くぞー！」

あたしの抗議をあつさり受け流し、男は斜めに上昇を続ける。眼下を見下ろすと、先ほどまであたしたちが飛んでいたコースは精霊輝弾の群れが駆け抜け、その輝線を地平線の彼方までのぼし続けているところであつた。

確かに上昇しなければ避けきれない状態だったかもしれないけど、出来ればもう少し具体的な予告がほしい……

そのとき、過ぎ去る足下を見つめるあたしの視界の端に再び光弾の輝きが点る。

「！ こつ、こつちに向け直しているわよ！」

「……わかっている！」

別に砲身が固定された大砲というわけではないのだから、その軸線が変更されるのは予想の範囲内なのだけど……

「ちい！ 上からもかつ！」

「えっ!? う、上からああ——っ!?」

あたしが目を向ける前に、反射的なタイミングで急旋回する男。

またしてもあらぬ方向を見たまま進路を変えられたため、冗談抜きであたしの華奢な三半規管は狂いかけた。

さながらレールのないジェットコースターである。軌道が全く読めないでどちらに感覚を傾けておけば耐えられるのかすら判断する余裕すらない。

「だ、だーからー！ 旋回する前に言って——!!」

あたしは悲鳴混じりの声を上げて進路予測不能な鳥男に抗議を繰り返す。

しかし、完全にあたしの存在を無視したかのように、男は言葉通り縦横無尽に空を翔る。

「な、なによ！ それは！ あたしが邪魔ってこと!」

「当然だよ。美琴が君を攻撃してきても、それを防ぐ事もできないだろ？」

極めて冷静な口調で言葉を続ける男であつた。確かにあたしには何も出来ないことは間違いないのだが、さすがにお荷物扱いはあたしのプライドが許さなかつた。

「当然よっ！ あんな常識外れな事、ごく普通のか弱い女の子が出来るわけないでしょうがっ！」

最大限に胸を張って言い放つあたし。

「いや、そ、そんな威張って言われても困るが……」

額に汗を浮かべ、引きつった頬をポリポリ掻きながら本当に困った顔をする男であつた。

「ともかく、ここは一体どこなの!? って言うか、どうしてあたしはここにいるの!？」

あたしは一連の騒動でこれまで口にしてこなかつた当然の疑問を未だに困った顔をしたままの男へと投げつける。

「……わからない……」

あたしの手を握る力是不変変わらないが、その言葉は心底疲れたような力のない口ぶりである。

その男の言葉にあたしは沈黙したのだが……

………あたしってどうしてここにいるんだろう………

初めから、そして今も続く疑問だけど、少し冷静になって考えてみる。

ここに來てから……確か、そう夢……夢とあたしは判断したのよね……

あ的美琴やこの男と違い、翼もなくこんな夜の空に漂っているなんて、ベッドの上で見る夢以外であり得るはずがない。

あたしはそう結論づけていた。……ただ、その先にこんな騒動に巻き込まれるとは思ひもよらなかつたけど。

しつかり握られているとはいへ、この男の細い腕を見ていると遠心力で飛ばされないので不思議なくらいだ。

だが、目を回してこの腕を放したりしたら、空中に漂うしか能がないあたしはそれこそあの精霊輝弾の良的である。一見頼りなさそうなこの腕とはいへ、あたしにとっては今は命綱に等しい。

紐無しバンジージャンプ——それは既に投身ともいう——をする気なんてさらさら無いあたしは、極めて不本意であるが必死になってその腕にしがみついていた。

とりあえず、あたしは目をつむって周りを見ないことにし、回避行動はすべて男に任せることとする。でないといずれ目を回して振り落とされるだろう。

そんなあたしの葛藤なんぞ思いもよらないであろう、この高速飛行男は光弾の軌跡を巧みな旋回で次々とかわしてゆく。

振り回されるあたしの身になって欲しい……本当に……

だが不思議なことに、目を閉じていると先ほどまで感じていた急旋回に伴う遠心力がほとんど感じられなくなつた。

どうしてなのかわからないし、今それをこの男に確認する余裕なんてない。差し当たって目眩を覚えるようなことが無いのなら好都合だ。今はただこの攻撃から逃れられることを願うだけなのだから。

「量が多すぎる……！ スピードはこれが限界なのに……！」

目を閉じているため音の情報だけが頼りになつているあたしの耳に、風切り音に混じつて男の絶望的な台詞が飛び込んできた。

それでも何とかかわし続けているが、それをあざ笑うかのような精霊輝弾の雨あられがあたしたちを包んでいるのだろう。目を瞑っているあたしにはわからないわけだけど……

「く、くそおっ！ お、重い荷物を抱えているから……い、いつもよりもスピードが……出ない……！」

「………」

「ごちんっ………」

重く鈍い音が流れる風の中に消え去つてゆく。

……でも……夢にしては、いやにリアルよね……

天使のような女の子に、まるで魔法のような光の弾による攻撃とそれを防ぐ透明な壁……どれも常識では計れないものばかり。

「……夢……じゃないのね……これって……」

あたしの口からは考えていた事が思わず出てしまつていた。

普段のあたしなら一蹴していただろう言葉だけど、今の今までの出来事は夢の一言で片付けるにはあまりにもリアル過ぎた。

今もあたしたちを標的にして飛び交う光弾を眺めていると、その現実味がさらに帯びてくるのだから不思議なものである。

「……半分あたり。よく気がついたね……」

あたしの言葉を聞いた男が、少し驚いた口ぶりで咳きを返してきた。

「——えっ……？」

バシユウウウウ!!

あたしの軽い驚きの声が、貫くような一条の光と爆裂音によって掻き消された。

「つっ……み、耳がギンギンする……」

至近距離で閃いた爆光と鳴り響いた轟音に、あたしは瞳と鼓膜を持つていかれそうな痛みを感じる。

「やられた……」

突然の爆光に閉じていた目を開けると、あたしの手を放して空中に静止したまま男が顔をしかめていた。

「ど、どうしたの……？ ひ、ひいつ!？」

問うあたしは男が見ていた方へと視線を滑らせ……息を呑む。そこにはまるで消え去つたかのように半分が無くなつてしまつた男の右翼が漂っていたのである。

あたしはグロテスクな場面を想像して、反射的に一瞬視線を逸らしてしまつていた。

「だ、大丈夫なの!？」

けれども、そこからは血が吹き出ている様子も無いし、当の男も痛みを訴えているようには見えない。

血まみれのスブラッタよろしく………ということだけは避けられ………

「いつてえ——！！ な、何をするんだ！ いきなり!？」

あたしは無言で男の腕を這い上がると、この失礼極まりない男の頭を握り拳で打ちのめしていた。

「お、女の子に向かつて重いなんてどういうことよ!？」

あたしはそのまま男の首根っこを引っつかんで怒鳴りつけた。

「……そ、そんな、細かい事を気にしている場合じゃないっ!？」

「な、何ですつてええええ!! あたしにとつては、じゅーぶん大事よっ!!」

そう、それは本当に乙女の重大事項なのである——

「——毎夜、毎夜のお風呂上りに体重計へと両足を乗せる瞬間！ 一時を置いてメーターの指し示すその数値！ そして……損生という名の好きなものを食べることが適わなくなる辛く……辛く過酷な日々の記憶——くうううううっ——……お、男のあんたなんかには、一生分からないでしょうけどねっ!!」

あたしは堅く握りしめた拳を振るわせながら、恐怖と苦痛の日々を振り返っていた。

「……いや、確かに分らないと思うけど、そんな力一杯全力全開で力説されても非常に困るんだが……」

なにげに困つた顔で頬掻く姿も様になるのは気に入らないわね、コイツは。

「そもそも、普段から損生しなければならぬほど食べているのが悪いん……ぐへえっ……!?」

鬼の形相でにらめ返しながら、あたしは無礼千万な人体ジェットコースター男の首を鷲掴み、全力でその手の握力を込める手足と同時にその翼までもジタバタとはためかせる姿は実に滑稽であるが、男の顔がしやれにならないレベルで赤青に変色し出したので、手を緩めることにした。

「げっ、げふお……み、美琴に倒される前に、君に倒されそうだ……」

これまた失礼な言い草であるが、いつまでもこんなところで立ち話ならぬ浮遊話しているわけにはいかないことは確かである。

「……ともかく、今は君と押し問答している場合じゃない。君がいるおかげでこつちは攻勢に出られないんだから……」

男はやれやれといった感じで、首を堅苦しそうに横に振る。

「……早く、早くここから動いた方がいいんじゃないの……？」

あたしは狼狽しながらも、声のトーンを落とし、冷静を装いながら男に問いかける。

さすがに怪我(?)をしている相手に強く出られるほど、あたしは周りが見えていない人間……ではないと信じたいから。

「……そ、そうだね……」

厳しい表情を浮かべながらもあたしの言葉に頷き、男は再び半分にもがれた片翼に視線を戻した。

「取りあえず逃げるには、殆ど支障は無いけど……」

「でも、これじゃ飛べないんじゃない?」

そもそもこの翼、これまで飛んでいる最中も飛行機の両翼のように固定されたままで、羽ばたいている様子は全くなかつたけどね。

何の役に立っているのか全然分らない品である。まあ、あたしの方はそもそも翼どころか、パジャマ姿で空に浮かんでいるけど。

「つと、これね。まあこれくらいなら……何とかなるかな……?」

男は折れた翼を自分の近くに寄せ、その手をかざした。

そして両目を軽く閉じると、静かに言葉を紡ぎ出す……

———天空にあまねく風の精霊よ………



男は呻くように言葉を絞り出す。

「どんな方法？」

「……要は君が意識を失いかけるほど驚けば良いんだよ……この世界はあくまで『夢の世界』であることには変わりない。だから君が目覚ませば……」

「……驚く……って……」

「いや……あたしはさつきから命の危険に晒されまくって、驚きっぱなしなんだけど……」

今の今まで悲鳴を上げっぱなし、驚愕しっぱなしなのである。男が言うように驚くだけでこの世界から去ることが出来るというのなら、既に帰っているはず。

「この男はさつき」美琴に襲われた時点で帰っている」と言っていたのは、普通はその驚きで目を覚ましていう事だったのだろう。

しかし、それでも帰れないあたしは一体……

「……にもかかわらず、この世界から君が離れることが出来ないのは……よっぽど神経が図太いか人なのか……別の理由かも知れない……」

懸命な表情を浮かべながら、男は翼に力を込め続ける。

『図太い』という言葉にあたしは多少こめかみを引きつらせたが、男の話を折っている状況でも無いので、華麗に無視する事にした。

……後で覚えてろ……

こうしている間にも、光弾が絶え間なく翼へと叩きつけられている。炸裂音とその場を支配している。

翼に遮られて美琴の様子は伺えないものの、あの笑みを貼り付けたまま、次々と弾を生み出して撃ち放っているのだろう。

「……な、なんとか君を驚かせられれば……あ……」

ハツとしたような顔をあたしに向け、声の調子をさらに落として言葉を紡ぐ男。

「……方法はある……俺のポリシーに反するけど……たぶんこれなら……」

「……あなたのポリシーっていうのは、これっぽっちも当てにはならなさそうだけど……どんな方法……?」

何か良い案が浮かんだようだけど、如何せんこの男が思いつ

くような方法である。口くでもないことである可能性は十分あり得る。

「そ、それを言ったら効果が無いよ……どうする?」

確かに『あたしを驚かせる案』なのだから、あたしに伝えてしまっただけの効果は薄れてしまうだろう。

とは言っても、予告有りで何をされるか分からないというのは、極めて判断に困る話ではある。なので「どうする」と言われても……

しかし、ここで断れば少なくともあたしには帰る手立てはないことになり、この訳の分からないところでこの男と心中する羽目になる。

それだけは……それだけは、絶対に！絶対にいやだ！

こんな見た目はともかく、見知らぬ男の腕の中で力尽きるなんて真つ平ごめんである。いや、知り合いでも嫌なものは嫌だ

けど。

この男の考えたあたしを驚かせる方法というのは非常に怪しいし……と、あたしはしばしば堂々巡りになりかけながらも思考を巡らせていた。

ぐ、ぐつ……

あたしが迷っている間も男は歯を食いしばりながら、美琴の攻撃に耐えている。

いつまでもこうやって耐えきれぬわけじゃない……!

「わ、分かったわ！ あなたの案……ちよつとどころかかなり不安があるけど、採用することにします！」

その苦しげな表情を見てあたしは決断した。もはや完璧にヤケである。

ヤケの結果が逃げる方法であることなのがあたし的に非常に抵抗があるけど、今までの状況を鑑みても足手まといであることは明白なのだからいつまでも意地を張らず、ここは戦略的撤退ということで無理矢理自分を納得させた。

「悪い……ね……取りあえず痛みは無いはずだから大丈夫だと思……覚悟は……しなくていい。効果が薄れると困るから……」

ドオゴオオオオオオ——ンッ!!

そのとき、ひととき大きな衝撃があたしたちを襲った。

「のああああああああ——!!」

「きやああああああああ——!!」

あたしと男は同時に叫び声を轟かせ、その場からはじき飛ばされてしまう。

あたしたちを守っていた翼が美琴の猛攻に耐えきれず、強引にこじ開けられてしまったのだ。

「ひやああああ——!!」

クルクル……と、まるできりもみ状態で落下する飛行機のようにあたしは夜空に投げ出され、少しの間あらぬ方向にその身を飛ばされていた。

あ、あの男は!?

先ほどの衝撃であたしと男は引き剥がされている。このままではあたしは完全に無防備なままであり、こんなところを美琴に狙い撃ちされたら……!

案の定、美琴はその隙を逃してはくれなかった——

「き、君——!! や、やめろっ！ 美琴——!!」

男の叫びもむなしく、美琴はまだ残っていた精霊輝弾をあらし目がけて解き放つ。

次の瞬間、あたしの目の前には光の弾が迫ってくる。無論、あたしの移動速度では避けられるようなスピードではない。

そして、光があたしを包み込み、視界が真つ白に染まった瞬間、もはやこれまで……と目を閉じて覚悟したのだが……

バスウウウウ——ンッ！

ド派手な音を立てて光球が炸裂した……のだが……

「……ん?」

いつになっても音だけで衝撃が来ないので、恐る恐る目を開けたあたしは自分の体を見下ろしたのだが……なにも変化は無かった……

「あ、あれ? な、なんとも……ない……?」

痛みがすぐに感じられないほど激しく身体を破壊されたわけでもなく、本当になにも起きていない。間違いなく直撃はなかったのに。





あの精霊輝弾ソウルシャイン弾の威力は男の翼を易々と折るほどのものだ。あたしの華奢なボディではとても耐えきれたものではないだろう。それなのに傷ひとつ付いていないなんて。

「……ど、どういうこと!? い、一体なにが……起きたの……?」

無傷のあたしを見て驚き戸惑っているのはあたしだけではない。

放った本人である美琴みことの方も表情は相変わらずだが、明らかに戸惑った様子でその動きを止めており、精霊輝弾と化しているはずの紅い糸が美琴の手の中に収まっていた。

しかし、このとき動きを止めなかったヤツがいた。一人だけ……

「い、いまだ——!!」

「——えっ?」

あたしから少し離れたところに飛ばされていた男は、目にも止まらない早さでこちらへと飛んでくると漂っていたあたしの肩を強引に引つ掴んで抱き止める。

……な、何を……!?

——あたしは、この時目の前にいる男が何をしようとしていたのかをキチンと考えるべきだった——

「……えっ……?」

なんの前触れも無く行われた一連の出来事は、あたしにとつて初めてのことだったので『その事』をとつさに理解することができなかった。

自分の唇に今まで感じたことない柔らかな違和感を感じた瞬間、あたしの意識は陶磁器のように真っ白に塗りつぶされた空間へと放り出される……

☆

「はわわわああああ——!?!」

あたしは自分の上に覆い被さっていた白い何かを跳ね除けて

その場から飛び起きた。

「はあ……はあ……はあ……」

息が荒い……というか苦しい……

あまりにもあんまりな出来事に、あたしは息をすることも止めてしまったらしい。

——って、

「(こは……どこ……?)」

上半身だけ起こしたあたしは、自分の首から下の姿を垣間見

る。

服装は……さっきまでと同じバジヤマ姿のまま、だけど……

一旦、正面を向いてから首をゆっくりと左右に振り、あたりを見渡した。

「あ、あたしの部屋……?」

ここは夜の上空ではなく、真正正銘、あたし——水月晶みづつきの部屋である。

ふと振り向くと、ついさっきまであたしの頭が横たわっていたであろう枕の横には、昨晚、寝る前に眺めていた星野写真——星雲星団の写真のこと——が掲載されている本が転がっていた。

そしてベッドの下には、今し方あたしが跳ね飛ばした物——羽毛の掛け布団——が床へとずり落ちて

急に起きた反動か、寝起きにしては神経がすこぶる高ぶって

おり、いつもはさして気にならない時計が時間を刻む機械音がいやに大きく響いて聞こえているこの部屋は——間違いなくあたしの部屋だ——

…………という事は………

「ゆ、夢……オチかい!」

白地の天井に向かって、誰とも無く突っ込みを入れるあたし。

まあ、あんな出来事、夢で良……くない!!

「ゆ、夢とはいえ、このあたしの……純粹可憐なる乙女のフリーストキスを無理矢理奪うなど言語道断! 今度会ったら首を絞めるどころじゃ済まさないわよ!!」

今さっきまで見ていた夢に『今度』があるかどうかは分からないけどね。

………それにしても……

「みよーに、リアリティに溢れた夢だったわね……」

あたしは膝の上に残っているカラフルなタオルケットに向け、深く、深くため息を吐いた。まったく……夢見の悪さで疲れるなんて初めてよ……

だいたい、夢なんて見てもすぐにその内容を忘れてしまう事が多いのに、今日の夢はほとんど全部覚えていた。

「ま、夢で良かったという事にしておきましょう……」

最後の部分は記憶から本気で抹殺したいけど、天使に追いかけて回されたり、妙な男と逃げ回ったりするなんて、夢の中で十分だから。

あたしは誰ともなく呟くと、ベッドから落ちていた掛け布団を引つ張り上げ、それを被って再び眠りに就いた。

まだ目覚まし時計が鳴っていない時間ならば、優しく二度寝へと誘う、文明人には防衛不能な魅惑の魔法マジックアイテムこと『柔らかない羽布団』に包まれていても大丈夫……のはずなのだが……

「はれ? 窓の外がやけに明るような気がするんだけど……」  
遮光性が高いカーテンの隙間から漏れる日差しは、部屋の奥まで照らすには十分な光量を持っていた。

あたしは、ベッド横の窓に置いてある時計を手に取り、針の指し示す位置を読み取る。

その針の位置は、長い方が十二、短い方が八……?

あたしの寝ほけた頭がその時刻を正確に認識する前に、部屋のドアがコンコンと少し強めに叩かれた。

「あきららく? そろそろ起きないと遅刻するんじゃないの?」

いつもなら既に朝食を終えている時間にもかかわらず、起きてこないあたしを起こしに来たお母さんの声が部屋に響く。

「………」

「なあああああ!?! ち、遅刻するうううううう——!!」

あたしは掛けたばかりの布団を跳ね上げるとベッドから飛び降りた。

そして、今日も慌ただしく普通の日常が流れ始める………

第1話 完

# 夢の残照

2010年 3月22日 初版発行  
2010年 5月 4日 第二版

## 奥付

発行元 旅人のザック  
著者 風野旅人

URL <http://www.din.or.jp/~tabito/>

E-Mail [tabito@din.or.jp](mailto:tabito@din.or.jp)

イラスト Hiroshi

URL <http://www.pixiv.net/member.php?id=411935>

E-Mail [ryo\\_cho\\_@fstnet.or.jp](mailto:ryo_cho_@fstnet.or.jp)

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『朱鷺魅』を使用しています。

